

恵比寿の余白



令和元年秋・冬

加藤文俊

ぼくたちの日常生活は、いくつもの出来事の連なりだ。それは、集まりや移動などのために、さまざまな形で分節化されている。手帳やカレンダーを見ると、日付や時間に沿って、仕事やプライベートの予定が秩序よく並んでいるはずだ。移動するさいには、「乗り換え案内」のようなアプリに頼ることが日常になった。

カレンダーに「空白」が目立つと、なぜか強迫観念をいだいて、次々と予定を入れて埋めようとする。スピードや効率を求めて、移動する時間をできるだけ節約しようと試みる。その結果、時間も空間も、そして心までもが余裕のない状態になってしまう。

何も予定がない日、まちなかへ出て、ノープランで彷徨う楽しさを知っているはずなのに、どうして余裕がなくなってしまうのだろう。寄り道をすれば、あたらしい出会いもある。人びとの暮らしの機微を感じるためには、ある程度のゆとりが必要なのだ。そう思っているながら、ぼくたちは、細切れになった時間と空間のなかを歩き来している。

年末、学生たちと忘年会を開いた。ちよūdん年の瀬で、店は大繁盛だった。一本締めでひとまずお開きになり、まだ早い時間だったので二次会に行こうという流れに。まさに忘年会シーズンというタイミングで、店を探すのは難しい。誰の発案だったかおぼえていないが、結局、近くの公園で過ごすことになった。何とも安上がりな二次会だが、立って取り囲めるような格好の場所があった。

もちろん、そのために準備されているわけではないが、バーのカウンターと同じくらいの高さ（一〇〇〜一一〇センチくらいだろうか）の台状のモノが、公園の入口付近に立っている。道路側から見える面には、公園の名前が載っているの、看板の役目を果たしているモノだ。奥行きも、簡素な立ち呑みのカウンターのようなサイズで、みんなを取り囲んで語らうのにちょうどいい。広すぎず狭すぎず、ほどよい距離感で過ごす場所になった。寒かったので、一時間ほどで二次会も終わってしまったが、風はなく、夜の空気は新鮮だった。誰かのスマホから、BGMが流れる。いきなり、ブランコに向かって駆け出す。一人ひとり、それぞれの公園への想いがあふれ出るようだった。

近年、まちなかに偏在する「すき間」や「空き地」にはたらきかけて、居場所をつくらうという試みを目にするようになった。もちろん、それを「戦術的（タクティカル）」だと謳って考えてゆく方法もあるが、

もつとゆるくていい。たとえば、浦和で誕生した「裏輪呑み」のような感じだ。一〇〇円ショップで手に入れたマグネット付きのバスケット（冷蔵庫などに貼って使う）を裏返して、標識やシャツターなど、まちなちの金属に取り付けてちいさなテーブルにする。このゆるさが、好きだ。でも、この「裏輪呑み」でさえ、道具を必要とする。もつとゆるく、いつそのこと道具など準備せずに、場所の可能性を引き出すやり方を考えてみたい。かぎりなく手ぶらに近い状態で、まちと応答しながら居場所をつくるのだ。そのためには、あたらしい可能性をひらく、まちな「余白」に気づく感性が必要になる。

ぼくたちが大切にしている「気づく力」は、余裕がないと発揮できないものだ。だからこそ、今年度は「余白」をテーマにして向き合ってきた。秋からは、恵比寿駅を中心に半径五〇〇メートルのエリアを対象地に設定して、「恵比寿の余白」をさがしている。まずは

スケジュールをやりくりして、のんびりとまちなちに出かけるところからはじめよう。

まちなかの「余白」は、ふだんは見えていなくても、ぼくたちの想像力を駆使すれば、見えるようになる。二次会に使える立ち呑みふうの場所は、公園の日常のなかにひっそりと隠れているが、条件を整えば、居場所として立ち現れる。その条件とは、「もつと話したい」「もうしばらく一緒にいたい」というような、ぼくたちのコミュニケーションへの欲求と無関係ではない。「余白」は、他でもない、ぼくたちによってつくられるのだ。

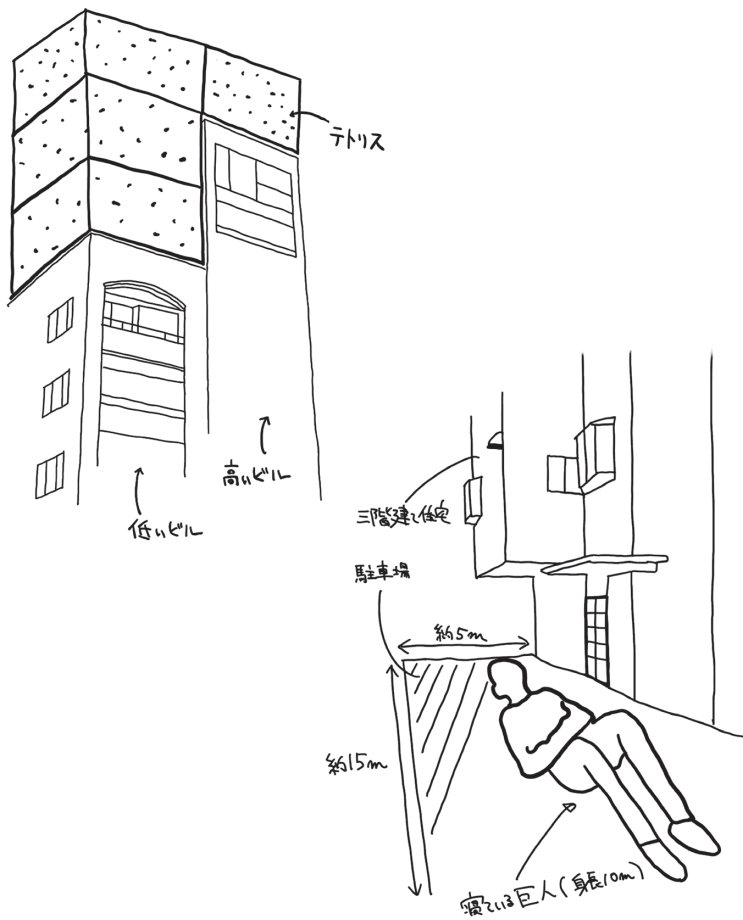
「恵比寿の余白」の成果は、二〇二〇年二月七日（金）〜九日（日）にかけて、「フィールドワーク展XVI むずむず」で展示する予定です。

◎恵比寿の余白 <https://vanotica.net/bsnyhk/>

妄想の余白

安藤 あかね・牧野 岳・山田 琴乃

[先生の車の色、嫌いじゃないです]



抜け目ない恵比寿

恵比寿は未知の場所だった。どのメンバーも、恵比寿に馴染みのある人は一人もおらず、訪れたことも、人生のうち一、二回ほどしかなかった。大人の職場と遊び場の二つのイメージがある恵比寿は、今回のような課題がない限り、学生には縁のない場所だと思った。渋谷のようなカオスさはなく、整然としたオフィス街とお洒落なレストラン街が隔てられながら立ち並ぶ。なんとなく街を歩いていても、恵比寿ガーデンプレイスや代官山の方に吸い寄せられていってしまうのが不思議でしかなかった。

街を初めて歩いた時、街が計画的に作られている感じがした。本当にこんなオフィス街に、余白など存在するのだろうか。そのような不安を抱くほどに恵比寿に抜け目なさを感じた。けれども、恵比寿の「抜け目ない」という障害こそが、僕たちの「黒から白を見る」という技を生み出したのかもしれない。

コントロールと対抗

フィールドワークを始めた時、駅を中心に恵比寿を散策していた。飲食店のビルとビルの間隙や道端

に置いてある謎の椅子、保険会社が管理している公園など、目につきやすいスペースを中心に観察していた。そんな中で気になったのが、駅から少しだけ離れた場所にある、非公認の喫煙所に人がたくさん集まっていた場所を目にしたことだった。一般的に、駅の近くの喫煙所は囲いを作ることで、分煙を徹底しなければならぬというルールがある。それに対して、その非公認の喫煙所は、「この場所は非公認です。近所のクレマーによる嫌がらせがあります。」という張り紙を自ら貼り、利用者に節度を持った喫煙を呼びかけていた。そこに、クレマーやコントロールしたい自治体と喫煙者のファンとの板挟みになっている、その場所の悩みを感じられた。そこで初めに思いついた余白のコンセプトは、「コントロールと抗うもの」という対立構造だった。そのコンセプトを視点にすることで、街の新しい余白が見えてきた。例えば、植木鉢をどのくらい路上にはみだしても許されるのか探っているように見える家。落書きしないようにフェンスがつけられているのに、そのフェンスの上からスプレーで塗られてしまっている白い壁。対抗というコンセプトを意識するだけで、これまで気付くことのなかった街の余白に

気付くことができるようになった。

白と黒

「対抗」という、街を見る条件を設定することで、街の新しい余白に気づけるようになった。けれども、それでもまだ、自分たちの進むべき方向がいまだに見えずにいた。そこで、よりわかりやすい街の見方を得るために、グループで手分けしながら、様々なジャンルの本を読んだ。そこで出会った、原研哉著『白』にある「白と黒」という表現が、自分たちの余白の見方に応用できそうなことを発見した。この「白と黒」という概念は、白が白い紙、黒が黒いペンと考えるとわかりやすい。白い紙があるからペンを探すのか、ペンがあるから白い紙を探すのか。この考え方は、自分たちのフィールドワークにも応用することができた。とりあえず街を歩いて見つけたスペースから、その裏になにかあるのか考えることが「白から黒を見る」。反対に、自分の状況を設定したり、変化させたりしてから、街のスペースを探すが「黒から白を見る」である。これまでの私たちのフィールドワークは、とりあえず街を歩いてみて、見つけたスペースを見つめる

ことで、なにがあるのか考えるという「白から黒」型のフィールドワークだった。けれども、前章の「対抗」のような設定で自分の視点を固定することで、これまで見えてこなかった余白が見えるようになったという「黒から白」型のフィールドワークの方が、抜け目なく整えられている恵比寿で余白を探すことに適していると感じた。「黒から白」型に可能性を感じるようになったことは良いものの、どのような黒を設定して街を歩けばいいのか。「対抗」の概念に飽きてきた私たちは、新しい「黒」になりうるアイデアを求めていた。

妄想

周りの他のグループのフィールドワークを見ていて、当時のどのグループも「黒から白」型のフィールドワークに切り替え始めていることを感じていた。ステッカーの貼れる場所から街を見ているグループがあれば、飲み物をおける台の代わりになる高さの場所を探しているグループもあった。どこのグループも、物を持って、街を見るといふものが多いことが特徴的だった。他のグループとの違いを作るためにも、ものに依存しないフィールドワークの仕方を目指すことに

した。

ある日、フィールドワークをしていて、街を歩いていた時にふと目線を上げると、恵比寿のビルの高さがまちまちであることに気づいた。その時、なぜかテトリスのようにその高さの不足を埋めることで、高さを揃えられたらいいなど頭の中で思っている自分に気がついた。街を歩いて、なにげなく見たスペースに想いを馳せて、勝手に脳内で妄想をして、見えている現実を補正している自分がそこにはいた。そこに注目した私たちは、自分が何の気なしに頭で考えている妄想を「黒」にして、街を見ることで、これまで見えてこなかった、新しい街の見方を獲得できるのではないかと考えた。初めに実践した妄想は、「テトリスでビルの高さを見る」と「巨人になって街のサイズを知る」というものだった。先に述べたように、「テトリスの見方」が使えるようになると、自然と目線が上がり、ビルの高さばかりを気にするようになるので、住宅街に足を運ぶことは少なくなった。一方、「巨人の見方」の時は、縦にも横にもスケールの大きな空間が気になるようになる。この場合はテトリスと異なり、巨人のサイズが具体的にどれくらいか決めないと、現実的に街の余

白に目を向けられないことに気がついた。そこで、妄想にさらなる詳細な設定やストーリーを付け足すことを試みる。

妄想の深掘り

ただ巨人の目線から街を見るといっても、具体的に巨人のサイズやその性格が分からないと、その巨人が余白をどう活用するか想像しにくい。そのため、詳細な設定を加えて、さらに余白を活用しているストーリーも足すことにした。「指名手配犯だったら」という妄想があつたが、どんな犯罪を犯して、どんな性格で、体格はどれくらいといった情報を加えていくことで、その指名手配犯にしか見えてこない余白が見えてくるようになった。夜になると、指名手配犯が好きそうな暗い路地裏が見えるようになったり、他人の部屋が覗けそうなガラス張りの部屋は彼が好みそうな空間だと想像できた。妄想という「黒」を設定することで、これまで気に求めてこなかった街の場所が、突然「白」に見えてくる。妄想を通した、人間のステレオタイプを逆手にとることで、新しい街の余白に気づけるようになったことが、我々の特徴だと言えるはずだ。

共感する余白

太田 風美・笹川 陽子・田村 糸枝梨・水野 健

[シスターズ]



初期段階での各々の認識

シスターズは、一人が恵比寿育ち、二人は恵比寿に数回訪れたことがある、もう一人が一度も恵比寿に来たことがないという四人のメンバーで構成された。

まずはグループ発足時点でそれぞれの余白についての認識を共有するべく、恵比寿で余白を感じるものを探す最初のFWを行った。その結果、各々が今までどう恵比寿に関わってきたかによって恵比寿のある特定の場所を「知っている度」に違いが出ているのではないかと考えが出た。例えば地元の人であれば、恵比寿に仕事でくるだけの人よりも駅から離れた場所について詳しい。様々な「知っている度」の人に恵比寿の「知らない場所」を聞き込み、誰にも開拓されていない場所を探すことができれば、そこが「恵比寿の余白」と言えるのではないかと考えた。しかし、私たち四人の感性が薄まってしまおうという問題により断念。グループワークは振り出しに戻った。

グループワークの目的の再確認

グループらしきを出すことが難しくFWの方法を決めるのに悩んでいた私たちは、再度グループワークの

目的を先生と確認した。それは「他人の余白観（余白の捉え方）を知って自分の感性を磨いていく」ことだった。個々人の余白観が異なることを前提に、その感性を理解し共感しようとするのがグループワークの目的である」とのことだった。この話を元に、まずはメンバーそれぞれが自分の感性を最大限駆使して一物件ずつ選び、最後にそれらの物件に共通する要素をもってグループの一物件を選ぼう、という方向性になった。また、グループワークの目的の再確認と合わせて、状態と属性、条件の定義も整理した。それは「余白は属性ではなくいくつかの条件が重なった時に見えてくる状態」ということである。条件というのはこの認識だけを持って、私たちは次のFWに向かった。

範囲を狭めてのFWとその失敗

個別行動でFWをし、それぞれが見つけてきた「余白を感じる物件」を集めた結果、全く異なるものが集まった。ただ、一物件だけ二人のメンバーで被るものがあり、二人のメンバーがその物件の余白観は異なった。このように一つの物件に二つ以上の余白観が働く可能性があるという、大きな発見を得た。

ある道の発見と感性タグ

この発見を持って、今度は一つの物件に対して四人全員が異なる余白観を働かせる物件を探し出すため、再びFWの方法を変えてみることにした。今までが個人で見つけてきた物件の中でもお気に入りへの物件に、メンバー全員で訪れるという方法である。これまではFWをする時、集合したあとに個人行動したあとで写真を見せあうということが多かった。だが、実際にみんなですべてに見ること、新たな発見があるのではと考えた。また、FWと並行して、「感性タグ」というそれぞれの余白観を言語化する取り組みを行った。例えば、あるメンバーは「#不可思議なものに反応し、あるメンバーは「#オノマトペを感じるものに反応する。またあるメンバーは「#心にゆとりを感じる」と反応する、などだ。この取り組みの結果、個人の中でも複数の異なる余白観を持っていることがわかった。このように、FWで訪れた物件に感性タグをつけてみると、ある一つの物件に四人全員のタグがあった。その物件は、「住宅街の中で突如と現れる砂利道」だった。「個人の状態」という条件、時間などの環境による条件がうまく重なり合ったおかげで、異なる余白観を持った

まま、四人全員が「余白だ」と感じることができると、物件を見つけたのである。

「余白力」という言葉の登場

私たち全員が余白を見出す砂利道は、異なる4つの解釈を持ち合わせているという意味で「私たちにとって」余白力の高い物件」となる。つまり、物件それ自体の余白力が高い状態は、同時に私たちが余白を見出す感覚が研ぎ澄まされているということだ。つまり、物件それ自体が余白力を持っているより、余白力は観察する私たちの方に余白観が異なる四人全員が集まっていることで、私たちは「余白力が高い」集団となる。そんな状態の私たち全員が「余白だ」と感じたのが砂利道なのである。このような物件を砂利道以外にも見つけるべく、さらにFWに繰り出した。四人同時にまちを歩く中で誰かが気になるものを見つけた時に周りに知らせるよう、パターンで光る星のステイックを利用して、その場で「余白を物件に感じる度合い」を五段階でレーティングするという方法に至った。その結果、砂利道以外にも、一つの物件に四つの解釈を見いだせる納得の物件を二つ見出した。

つまり私たちは「余白」という人によつて解釈の異なる概念について、町を共に歩くことによつて理解しようとする試みを繰り返した。それが一つの状況について多くの解釈ができる可能性の指標「余白力」という見方を導き出したのだ。

「余白力」を生き生きと伝えるために

ここまでのプロセスから、FWするときの異なる余白観を持つ人数が増えれば、集団の余白力は高くなることが分かった。ということは、他者の余白観を取り込めれば、個人の余白力も必然的に高まるだろう。そこでメンバー個人の余白観に共感しようとするためのツールとして「余白観フィルター」を作った。これは簡潔な文字数と強い主観性という特徴を併せ持つ詩を透明なアクリル板に印刷したものである。これを通して街を見てみることでそれぞれがどんな余白観を持って街を見ているのかを擬似的に体験できるのである。余白観フィルターを制作後、実際に四人で恵比寿に集まり、自分以外のフィルター三枚をローテーションさせながらフィルターに合う物件を見つけてFWを行った。

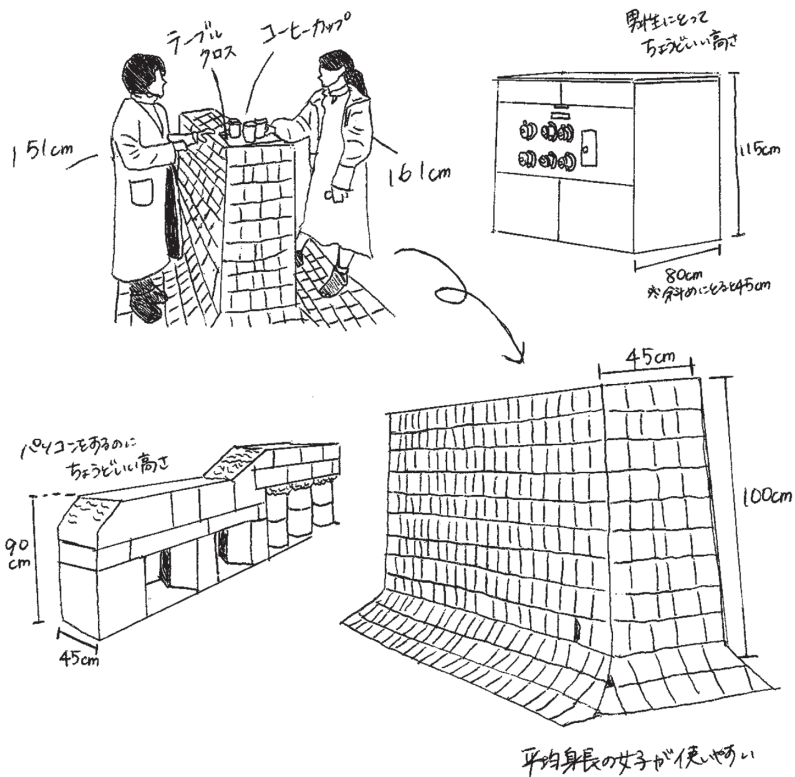
このFWの結果、一人あたり七〜八物件をみつけることができ、FW後の振り返りではメンバー全員が無理なく他の人の余白観を理解し、物件を実際に発見する作業をすることで共感に近づいたと感じていた。フィルターを使い、自分の状態を変えて、いつもと違う視点を持つて歩くことで、普段の自分では目に留まらない光景に足を止めることができる。また、自分のフィルターを使ってメンバーが撮った写真を見てみると、自分には見出せなかった余白の光景が収められていた。余白観フィルターは余白観の共有だけでなく、もともと持っている自分の余白観の拡張にも有効なのである。

グループワークが始まって以降、私たちはグループの余白観のまとまりの無さに頭を抱えて、他の人の余白観に対して「理解はできるが共感はできない」と感じていた。しかしそれは頭の中だけで考えているからであり、余白フィルターというツールを持って現場に出てみるだけで、すんなり共感できてしまった。この気づきに至るまで随分と時間はかかってしまったが、人の感性を理解し、共感しようとする努力により、私たち個々の見える世界が広がったことに嬉しく思う。

バーカウンターの余白

坂本 彩夏・佐藤 しずく・中田 早紀

[マルサ劇場]



街に出る

私たちは、話し合うより先にまず実際に恵比寿に出て行くことから始めた。そして、歩いてみて余白だと思ふ場所を、その場で共有した。特に、中にチラシが詰め込まれている郵便受けや、住宅街の門扉の隙間に置いてある猫よけのペットボトルなど、私たちがこれまで抱いていた恵比寿のイメージ(おしゃれ、大人な街、オフィス街など)とはかけ離れた光景に、余白を感じた。しかし一方で、これらの余白は恵比寿ではなくても観察可能なのではないか、ミクロな視点で街を捉えずぎているのではないか、という疑問が生まれてきた。

マクロな視点でみる

よりマクロな視点で恵比寿を見るために、私たちは自転車です比寿を走ってみることにした。歩いている時よりも速度が増し、視線が高くなることで自然と街を大きく捉えることができるのではないかと考えたからだ。実際に走ってみると、道の凹凸の変化を感じられたり、昼過ぎには小学生がとて多いこと、アパートの中にある個人事業所が多いことなどがわかってきた。予想通り、歩いている時とは異なる視点で街を捉

えることができた。また公園やお店という、より大きなスケールで恵比寿の余白を意識的に捉えようと試みた。

何かがあることによって余白に気づく

このようにフィールドワークを行う中で、「何かがあることで気がつく場所」≠余白なのではないかという新たな考えが私たちの中で生まれた。例えば「恵比寿コンテナ」という場所は、二〇一八年三月から三年間という期間限定で存在する。期間限定となっていることで、時間的にも空間的にもその前後は「余白」と呼ぶことができる。また恵比寿東公園裏の塀の上に空き缶が置かれている光景を見ついたり、普段は見過ごしてしまふような弁当店の前に行列ができていたのを偶然見かけ、「何か」があることでその存在に気がつくという余白の性質に近いものを感じた。

Y字で街をみる

グループごとにフィールドワークを進めながら研究室のメンバーと意見を交わすうちに、余白とは「固定的なものではなく、その時の条件によって変化するも

のである」という考えが浮かび上がってきた。そんな考えのもと、私たちは様々な方法で条件を変え、再び恵比寿に足を運んだ。

まず身体的な状態を変えて恵比寿を捉えようと試みた。グループの中にバレエ経験のあるメンバーがいることから、彼女がY字開脚することができると余白が街中で探すことにした。このようなワークを行っていく中で、実際に入れる幅だけでなく、「人通りが多い場所ではやりづらい」「暗い場所はやりやすい」「広くて人が多くても銅像が近くにある場所だ」といった精神的な理由も考慮され、これまでとは全く異なった視点で街を捉えることができた。また回数を重ねるうちに人目を気にせずにY字開脚ができるようになっていったという彼女自身の変化も見られた。

現場目撃を果たす

次に、時間帯を変えてフィールドワークを行った。毎回水曜日の十三時から十六時までという決まった曜日・時間帯に恵比寿を訪れていたのだが、金曜日の夜十八時から二十一時の間に訪れることで、今まで見えていない余白が見えたり、見えていた余白が見えなく

なったりするのではないかと期待した。以前から気になっていた恵比寿東公園裏を見に行く、実際に空き缶を持って塀をテールブルのようにして飲んでいる人やタバコを吸っている人の姿を目撃することができた。このように現場目撃を果たせたことで、恵比寿公園裏は単なるゴミ捨て場ではなく、あたかもカウンターかのように使われていることを確かめることが出来た。

そして私たちはこのように、本来の使われ方ではないけれど飲んだり話したりするのにちょうどいい高さのスペースを「バーカウンターの余白」と名付け、様々な場所に存在するバーカウンターの余白を採集するのことにした。

痕跡を探す

まず、私たちは実際にバーカウンターとして使われている現場を目撃するために、改めて空き缶や紙、パックなどの「痕跡」が残っている場所を探した。そうすることで、駐車場や公園など誰の場所かは一見わからない公共の場所にそれらの痕跡は多く置かれていることがわかった。逆に、住宅地では少ないことに気がついた。また予想通り、工事現場の近くでは作業員の方

が休憩時間にコーヒーや栄養ドリンクを飲んでいたり、思われる痕跡が見られた。

このように調べて行くうちに、痕跡が多くある場所や私たちがバーカウンターらしいと思う場所にはどのような共通点があるのだろうか、ということが疑問として上がってきた。それを詳しく探るため、バーカウンターとなり得る場所の計測をすることにした。

測る

メジャーを持って歩き、これまで見てきたバーカウンターの余白物件の高さ、奥行き、横幅をひたすら測った。そうすることで、次第に飲みながら長居しやすい場所（バーカウンター）の黄金比率がわかってきた。平均身長的女性（158cm）にとつての黄金比は、高さ100cm、向かい合う幅45cm。高さは、コーヒーやお酒の缶を持ちながら手首を置ける程度がちょうど良い。また、向かい合う幅に関しては誰にとつても45cmがちょうど良いことがわかった。例えばフィールドワーク中に現場目撃をした、サラリーマンが話しながらコーヒーを飲んでいた場所は、実際の幅は80cmほどあるが、彼らは話しやすい距離を保てるように調節し角と角で斜めに

向かい合っていた。計測すると見事に45cmだった。

比較する

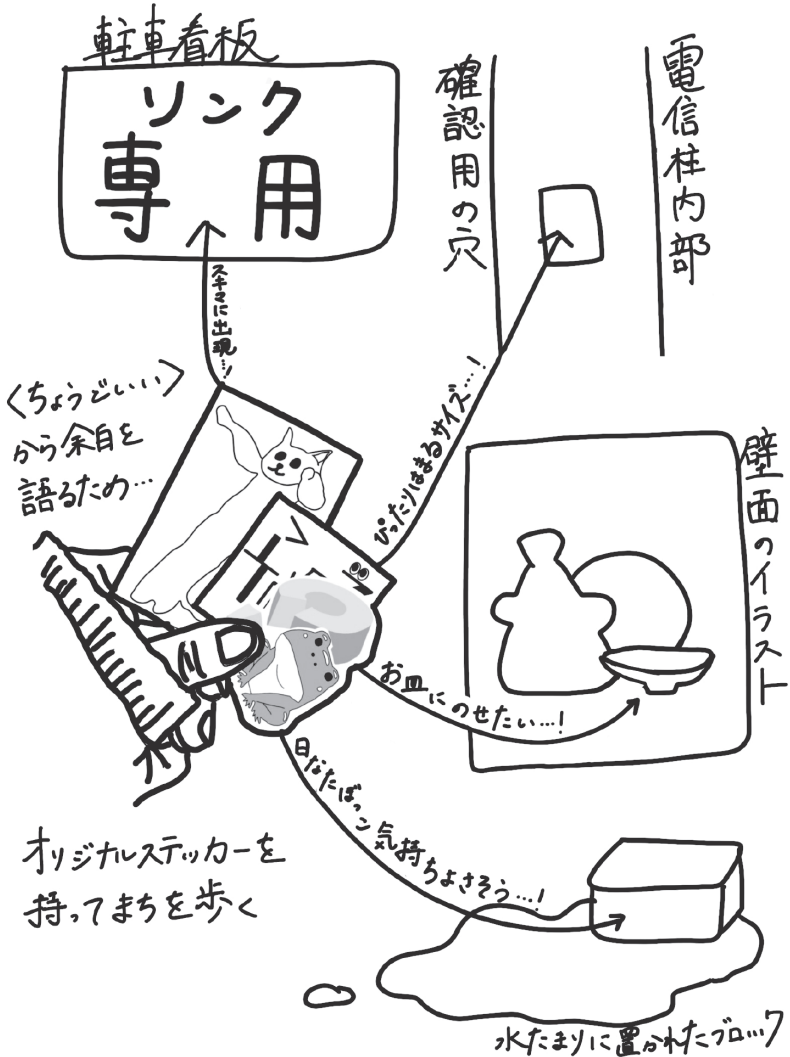
この作業を続けていると、私たちの中である変化が起こった。痕跡がないところでも、バーカウンターになる可能性を秘めた場所を見つけられるようになったのだ。その上、測ってみると黄金比に当てはまることが多かった。知らず知らずのうちにバーカウンターとして使えそうな場所を探す身体感覚を身につけていたのだ。

また、明るさや人目のつきやすさ、綺麗さ、周りが壁や建物などに囲まれているかどうかなどの項目も考慮した上で、それぞれの物件を比較しその印象を話合った。すると各物件の個性がくつきり浮かび上がってきた。実際にメジャーを用いて計測することで「なんとなく」バーカウンターのようには思っていた場所が、それぞれ強い個性を持ったバーカウンターに見えてきたのだ。

〈ちょうどいい〉余白

染谷 めい・堤 飛鳥・藤田 明優菜・牧野 渚

[エび暖 mz]



恵比寿のステッカーの魅力に惹かれて

恵比寿を歩く中で、それぞれが直感的に「余白」だと感じたものを共有したところ、グループ全員が共通して、飲み捨てられた空き缶、落書きやステッカーなど“背後に人の営みを感じるもの”に興味を抱いていたことがわかった。当初、メンバー四人はほとんど恵比寿に足を運んだ経験がなかったため、シンボルであるガーデンプレイスのイメージから恵比寿は整頓されているまちであると考えていた。そのため、実際に恵比寿を歩いたときにステッカーが多く貼られていることに驚きを感じ、違和感を抱いた。私たちがもつイメージとは裏腹に、ステッカーを貼る人にとって、恵比寿はステッカーを貼る「余白」となりうる場所が多く存在しているまちであるかもしれない。そこにステッカーの面白さを感じ、追いかけることにした。

〈ちようどいい〉を基準に「余白」を考える

私たちは恵比寿に貼られているステッカーに「余白」を感じ、興味を抱いたが、それが課題である「恵比寿の余白」とどのように結びつくかはわからなかった。一度立ち止まり、メンバーの余白観を整理するた

め、まずは自分の住むまちで「余白」を探すことにした。ひとりひとりの「余白」の定義を共有する中で、四人が感じる「余白」には、〈ちようどいい〉という漠然とした感覚があることに気がついた。その感覚を基準に「余白」を語れるのではないかと考えた。

〇〇を手にする事で自分の状態を変える

四人が共通して、「余白」に対してなにか〈ちようどいい〉の感覚を抱いていることがわかったため、お互いに感じている〈ちようどいい〉を恵比寿の中で可視化し、すり合わせることを試みた。まずは一種類のステッカーを作成し、それを持つてまちを歩き、それぞれがステッカーを貼るのに〈ちようどいい〉と感じた場所を共有した。その一方で、ステッカーを貼るのに〈ちようどよくない〉と感じた場所から、逆説的に〈ちようどいい〉の感覚を捉えるため、ステッカー剥がしを持つてまちを歩いてみることも実践した。つまり、ステッカーを貼りたいと思う立場と、そうでないと立場の両方からこの感覚にアプローチしようとしたのである。それぞれが〈ちようどいい〉と感じた場の要素を抽出し、グループの共通点を導こうと

したが、実際にはメンバー全員にびったりと当てはまるものはなかった。

「余白」の難しさを噛み締めた一方で、大きな発見もあった。ステッカーとステッカー剥がしを持ってまちを歩いたことで、実際にまちを歩くときの視点が変わった、ということだ。「ステッカーを手にしていると、思わず人通りの少ない道へ向かってしまう」や「ステッカー剥がしを持つことで、正義感が生まれる」など、手にする物によってまちを歩く自分の状態を変えることができるかもしれない、と気が付いたのである。

また、ステッカーの形や絵柄によって自分たちの状態がどのように変わるかを確かめるため、改めて四種類のアナログステッカーを作成した。内訳はカエル、バームクーヘン、ネコと独自にデザインしたロゴである。実際に恵比寿に貼られているステッカーを参考に、大きさや形、色が様々になるよう意識した。四枚のステッカーを手に、一人で計二回、それらを貼るのに「ちようどいい」場所を探して歩いた。その結果、ステッカーの種類によって、様々な違いが見られた。例えば、カエルは四センチほどの小ささだったため、ピッタリ収まるような場所を探す傾向にあった。バームクーヘン

ンは美味しそうに見えるため、明るい背景に貼りたいと思うことが多かった。さらに、二回歩いたことでたとえ同じステッカーでも時間帯や周囲の状況などの条件によって貼りたいと感じる場所が変わることに気づいた。

話し合いの中で、私たちが「ちようどいい」と感じた場所にはほとんどステッカーが貼られていないことがわかり、「私たちのステッカーへの向き合い方が実際に貼る人たちよりも丁寧なのではないか」という意見が出た。私たちがあれやこれやと考えを巡らせ、周囲に調和させようとするのに対し、彼らにとつてのステッカーは縄張りの意味合いが強く、多くの人の目に触れることが重視されるのかもしれない。

定点観測で見られた変化

すでにステッカーが貼られている場所の変化を目撃するため、ステッカーを手にして歩くフィールドワークと並行して、定点観測を実施していた。その中で大きく変化が見られたのが、恵比寿駅西口付近の高架下の壁面に描かれた警視庁のシンボルマスケット「ピーポくん」である。観測を始めた十一月五日の時点で

「ピーポくん」に大量に貼られていたステッカーが、観測六回目となる十二月六日には、全て剥がされていたのだ！本来想定していたよりも大きな変化であったため、大変な衝撃を受けたのである。

「ピーポくん」を通じて、同じ場所に対して「貼る」「剥がす」という二つの立場がそれぞれ異なる働きかけを行っていることを観測することができた。そのため、そこに二つの立場のサイクルが見られると考えた。再びステッカーが貼られることを期待し、一月二十一日まで定点観測を続けたが、変化は見られなかった。このまま変化がなかったら、ステッカーを貼る人にとつて、「ピーポくん」はもう「ちようどいい」で「余白」ではなくなった、といえるかもしれない。

アウトプットと展示

私たちは「ちようどいい」という感覚を手がかりにして、「余白」を語ろうと試みた。ステッカーを手にしてまちを歩き、「ちようどいい」と感じた場所を探し続けてきた。その中で、「ちようどいい」の感覚は人それぞれであり、手にするステッカーの形、色や絵柄にも左右されることがわかった。その感覚を体験し

てもらうため、会場内にはステッカーを貼ることのできる展示物をいくつか設置した。また、グループの展示スペースには、定点観測を続けてきた「ピーポくん」と、メンバーが恵比寿で見つけた四種類のステッカーに対するそれぞれの「ちようどいい」を計十六箇所ひとつの地図にまとめて展示した。

まず、来場者に私たちそれぞれの「ちようどいい」の感覚を紹介する。次に、それを基に私たちのグループの活動を説明し、ステッカーを配布する。四種類だったステッカーは、色違いを含めて三十三種類に増やした。来場者実際にステッカーを手にしてもらい、「貼りたい」と思う場所を探すことで「ちようどいい」という感覚を体験してもらおう、という試みである。

私たちはステッカーを手にしてまちを歩いたことで、いつもと違う視点でまちを見つめるようになった。それゆえに、今までなら意識しなかったであろうお店の存在や道端の看板にも気がつくようになった。ステッカーを手にして歩くことは、今まで見過ごしてきたあたりまえの物事に目を向けるきっかけを与えてくれたのだ。

恵比寿の余白
<https://vanotica.net/bsnyhk/>

2020年2月7日発行
編集・発行 慶應義塾大学 環境情報学部加藤文俊研究室 <http://fklab.today/>
〒252-0882 神奈川県藤沢市遠藤 5322 デザイン棟B (ドコモハウス)